

## リサイクル化学を巡る雑感

(一社) プラスチック循環利用協会専務理事 井田久雄

1998年7月に東京理科大学の講堂において開催された設立総会記念講演会で「化学産業政策課題とリサイクル」と題する講演をさせていただき榮に浴したことが、私と FSRJ との最初の出逢いでした。その後、現在の職に就任し、二度目の出逢いを果たすまでにおよそ10年の月日が流れていました。それからというもの、FSRJの活動にはできるだけ参加させていただいております。それというのも、FSRJの活動とその周辺には浅学菲才の私にも学ぶことが多いからです。

### 一 知足 (ちそく)

本年、G7サミットが我が国で開催され「富山物質循環フレームワーク」という文章が採択されました。この中で“awareness of sufficiency”の考え方を市民に広げていくことが持続可能な消費に有効であることが記載されています。各国トップの方々には聞きなれない用語のためか“an idea that we should not be greedy, but be satisfied with appropriate amounts”という説明が加えられています。FSRJの会合に何度か出ていけば、このような説明抜きで竜安寺方丈にある蹲(つくばい)のことを思い起こすでしょう。首脳会議で取り上げられるはるか以前から「知足」という思想の重要性を披瀝してくれるアカデミックな集団を他に知りません。

### 二 知足不辱 (ちそくふじょく)

2013年10月にニューデリーの India Habitat Centre で開催された ISFR では、インド政府の高官からスピーチを頂いたのですが、その中で印象に残ったのは“Frugality”の重要性を強調していたことです。この会議の前後にデリー市内にある“ラージ-ガート (Raj Ghat)”を訪れました。ガンジーの残した言葉に感じ入りながら、写真をみると手ずからチャルカ(糸車)で紡いだ糸で織りあげた粗末な手織木綿を身に纏っています。1931年に宗主国イギリスのダウニング街を訪問した際にもその身なりは同じです。宗主国の方から見れば貧乏くさい衣装でも、「足るを知れば辱かしめられず」との気概があったのではないのでしょうか。歴史を動かした“Frugality”の力を感じました。

### 三 喜足小欲 (きそくしょうよく)

2011年の ISFR は、スペインのトレドで開催されました。トレドはタホ川の川沿いの町ですが、カスティーリャ地方の多くは乾燥した赤い土地が続いています。水をどうしていたのでしょうか。必要なものを欲しがることは文明の発展の力になります。わき道にそれて見に行ったセゴビアの水道橋にその答えがありました。ローマ時代に建設された水道橋は19世紀の中頃までセゴビアの町に水を供給し続けたとのこと。イスラム教・ユダヤ教・キリスト教の文化が交錯した文明を千数百年に亘り持続的に支える技術があったことには感服しました。

### 四 持続可能な発展

FSRJは2018年に設立20周年を迎えることとなります。設立10周年にはFSRJの名称・目的の見直しの議論がされました。今後どうするにせよ、様々なバックグラウンドを持つ会員の情意

が混じり合い、魅力ある議論の場として、FSRJが持続可能な社会の礎となることを祈念します。「化学」は具体性と情意に基づく世界です。「若し現実界から情意を除き去ったなら、もはや具体的事実でなく抽象的概念となる。物理学者のいう世界は、幅なき線、厚さなき面と同じく、実際に存在するものではない。」(西田幾多郎)、「リサイクル化学の進む道は人間社会の学習である。」(奥彬)など先哲の教えを胸に刻みつつ、思うままに個人的な雑感を記しました。